

第4回 教育研究内部質保証評価会議が開催されました



2024 年度教育研究活動の検証事項（報告）

- ①学生に対するアンケート結果（IR 室）
- ②教育活動の状況（教育機構）
- ③研究活動の状況（研究機構）
- ④学生生活支援活動の状況（学生生活支援機構）
- ⑤大学院の活動の状況（各大学院研究科）
- ⑥学修環境の状況（映像による紹介）

2025 年 12 月 28 日、大阪医科薬科大学の教育研究活動の自己点検・評価の結果（内部質保証）を検証する第4回教育研究内部質保証評価会議が開催されました。この会議は本学の学部間協議会のもとに置かれ、大学全体の内部質保証体制とその稼働状況を学内外の構成員に評価していただくために、年一回開催されています。構成員は、各学部により選任された教員、他大学の教員、行政・職能団体・産業界等の関係者、患者の立場の方から選出されています。今回の評価対象は2024年度の教育研究活動でした。

会議では、冒頭に議長の佐野学長から評価の流れについて説明があり、つづいて IR 室、教育機構、研究機構、学生生活支援機構、各大学院研究科の順に、それぞれの年報等に基づいて 2024 年度の活動状況と自己点検・評価の結果が報告されました。

大学全体として自己点検・評価の PDCA サイクルが機能し改善が図られており、大きな問題はないとの評価

報告内容を受けて、構成員からは「前回までの指摘事項に対する対応が進んでいる」、「各会議等でデータの集約・検討も行われている」、「アセスメントプランに則って PDCA サイクルがきちんと回っている」との評価が示されました。一方で改善点としては「年報の記載内容の改善」、「勉強意欲に関してさらなる解析・方策の検討」が指摘されました。

総括として必要な改善を行うことを前提に 2024 年度の本学の教育研究活動には全体として大きな問題はないことが構成員の満場一致で確認され、閉会しました。

今回の会議の報告書は以下のリンク先で閲覧可能です。

https://www.ompu.ac.jp/about/internal_quality_assurance_2/f2pjpgc000000ckzy-att/dr46sf0000003csh.pdf

3学部 国家試験の結果

医師国家試験		薬剤師国家試験		看護師国家試験	
新卒合格率 (前年度)	96.3% (97.9%)	新卒合格率 (前年度)	95.9% (86.8%)	新卒合格率 (前年度)	98.9% (98.9%)
全国平均	94.7%	全国平均	86.3%	大学全国平均	96.3%
既卒合格率	66.7%	既卒合格率	54.6%	既卒合格率	100.0%
全国平均	54.6%	全国平均	41.3%	大学全国平均	43.0%
全体合格率	95.5%	全体合格率	85.1%	全体合格率	98.9%
全国平均	91.8%	全国平均	68.5%	大学全国平均	94.2%

2025 年度卒業生が 2026 年国家試験を受験しました（医学部新卒 109 人・既卒 3 人、薬学部新卒 219 人・既卒 77 人、看護学部新卒 91 人・既卒 1 人）。教育の質保証において注目される新卒合格率は、医師国家試験が 96.3%、薬剤師国家試験が 95.9%、看護師国家試験が 98.9%、保健師国家試験が 100.0%、助産師国家試験 100.0%でした。

保健師国家試験	
新卒合格率	100.0%
助産師国家試験	
新卒合格率	100.0%

総評 矢野 貴人 医学部長

2026 年の第 120 回医師国家試験の合格率は、新卒が 96.3%（109 名中 105 名）、既卒が 66.7%（3 名中 2 名）、全体で 95.5%（112 名中 107 名）であり、いずれも全国平均（新卒 94.7%、既卒 54.6%、全体 91.6%）を上回る高水準を維持することができました。全体の合格率については全国 82 校中 20 位でした。入学者選抜から卒業までの 6 年間の学部教育のあらゆる段階での制度・カリキュラム等の継続的な検証が、今後の国試合格率の維持・向上にもつながると期待しています。

総評 浦田 秀仁 薬学部長

今年実施された第 111 回薬剤師国家試験の新卒者の合格率は、95.9%（全国平均：86.3%、私立大学 58 校中 5 位）、既卒者を含む総数の合格率は 85.1%（全国平均：68.5%、同 8 位）と、高い合格率を達成することができました。来年以降もこの高い合格率を堅持していきたいと考えています。一方、薬剤師国家試験は標準修業年限内合格率（ストレート合格率）も重視されていますが、今回は 61.4%と振るわず、長期的対策として、学力を担保しつつ低学年からの安定した進級率を確保する施策が急務と考えています。

総評 鈴木 久美 看護学部長

2026 年の看護師・保健師・助産師国家試験の合格率は、看護師が既卒者を含め 98.9%、保健師・助産師はいずれも 100% となり、3 職種すべてで全国平均を上回る高水準を維持しました。今年度は必修問題の難易度は例年並みであった一方、一般問題・状況設定問題では、深い知識を問う問題、思考力や臨床判断力を重視する出題が増加しました。今年の学生も試験への動機づけまでに時間を要しましたが、国家試験対策委員会とチューターが連携して支援を重ね、学生一人ひとりが最後まで粘り強く学び抜いた成果が、本年の良好な結果につながったものと評価しています。

AI 教育の現在

教育政策と 本学の取り組み

AI に対する政府の方針・戦略

2019 年、内閣府は統合イノベーション戦略推進会議決定として「人間中心の AI 社会原則」を発表しました。そこでは「社会全体が AI による便益を最大限に享受するために必要な変革が行われ、AI の恩恵を享受している、または、必要な時に直ちに AI を導入しその恩恵を得られる状態にある」ことを「AI-Ready な社会」と定義し、それを構築するための 3 つの基本理念を掲げています。

1. 人間の尊厳が尊重される社会 (Dignity)
2. 多様な背景を持つ人々が多様な幸せを追求できる社会 (Diversity & Inclusion)
3. 持続性ある社会 (Sustainability)

さらに、この基本理念に基づく、AI の利用を含む社会実装時の行動指針として 7 つの社会原則が示されています。

1. 人間中心の原則：基本的人権の尊重
2. 教育・リテラシーの原則：平等な教育の重要性
3. プライバシー確保の原則：個人情報の保護
4. セキュリティ確保の原則：社会システムの安全性確保
5. 公正競争確保の原則：資源の独占による不公正の禁止
6. 公平性、説明責任及び透明性の原則：差別的決定の禁止
7. イノベーションの原則：社会実装の促進

注目したいのは「人間中心の AI 社会原則」の 7 つの社会原則の二番目に「教育・リテラシーの原則」が挙げられていることです。この原則に基づき、現在、格差や分断を生まないよう平等な教育機会の提供のあり方、倫理観や批判的思考の育成を含むリテラシー教育のあり方が盛んに議論されています。

内閣府 人間中心の AI 社会原則会議
<https://www8.cao.go.jp/cstp/ai/ningen/ningen.html>

文科省の施策と本学の取り組み

高等教育での AI 教育を後押しするため、文科省は 2021 年度から「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度」を開始しました。この制度は「リテラシー（初級）レベル」と「応用基礎（専門分野への応用）レベル」の 2 段階で構成されており、本学では 2022 年、文科省より認定された「リテラシーレベル」を各学部の必修科目として導入しています。これにより大学生に求められる AI の素養が身につくようにしています。

生成 AI を筆頭に急速な AI（人工知能）技術の進歩と普及が進んでいます。AI に対しては多方面での課題解決やイノベーション、日々の生活の便利さに期待が膨らみますが、一方で実際に使用することのリスクに対する不安も大きいのが現状ではないでしょうか。その状況は大学教育においても同様です。ここでは、AI に対する国の方針や教育における政策を整理するとともに、大阪医科薬科大学では教育研究活動において AI に対してどのような取り組みを行っているかを紹介します。

それと並行して、生成 AI の急速な進展を踏まえ、文科省は 2023 年に「大学・高専における生成 AI の教学面の取り扱いについて」を策定しました。この指針では、学生および教職員の利活用が想定される場面と留意すべき観点が示されています。

生成 AI の利活用が想定される場面

- ・学生による主体的な学びの補助・支援（論点の洗い出し、情報収集、文章校正、翻訳やプログラミングの補助）
- ・学生が生成 AI を使いこなすための教育（プロンプトに関する工夫や出力の検証、技術的限界の体験）
- ・教員による教材開発等への利活用、事務運営の効率化

留意すべき観点

- ・生成 AI と学修活動との関係性、成績評価
- ・生成 AI の技術的限界
- ・機密情報や個人情報の流出・漏洩の可能性
- ・著作権との関係
- ・AI 等に関する基本的な知識等の理解

これを踏まえて、本学では全学の教育研究活動を取りまとめる教育機構、研究機構、学生生活支援機構と国際交流センター、アドミッション・センターが、それぞれ生成 AI の利用基準を定め、全学的に適切な利用を促しています。これらの基準は、技術の発展にともない継続して見直していくこととしています。

また学生に対してのみならず、教職員に対する AI 利活用の支援も教育研究の質向上や業務の効率化を目指す上で重要となります。本学では、教員に対しては AI 利用に関する講演・セミナーの参加機会を提供や、学術論文執筆を支援する AI ツールの導入を試みるなどの研究支援がすでに始まっています。また本学ではオンラインシステムの導入など事務業務における DX 推進に取り組んでおり、事務職員を中心に組織的な AI 導入を見据えたプロジェクトも進められています。

本学病院を含む医療機関では AI が漸次導入されており、そうした状況で将来後塵を拝することがないよう、本学の学生、教職員全体で AI の利活用に向けた取り組みを行っています。

文部科学省 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/00001.htm

文部科学省 大学・高専における生成 AI の教学面の取り扱いについて
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2023/mext_01260.html
大阪医科薬科大学 生成 AI の取り扱いに関する基本方針
<https://www.ompu.ac.jp/about/g-ai/index.html>

医療者教育において どのように AI と向き合うか

大阪医科薬科大学では、教員が授業内容・指導方法を改善し、教育の質向上を図るための組織的取り組みである FD（ファカルティ・ディベロップメント）を定期的に行っています。その一環として、2026 年 3 月 6 日に教育機構主催 3 学部合同 FD が「生成 AI 時代の医療者教育と研究：生成 AI とどう向き合うか」と題して講師に笠井大先生（千葉大学大学院医学研究院医学教育学）をお招きして開催されました。この FD に参加した IR 室担当教員の宮崎誠先生（薬学教育推進センター教授）が、ご講演の内容と所感を報告します。

生成 AI は、医療者教育を大きく変える可能性を秘めている。しかし、その可能性を適切に引き出すためには、現状を正確に理解し、教育方針を全学的に議論する基盤が必要である。去る 3 月 6 日に本学北キャンパス講堂で開催された三学部合同 FD では、笠井大先生から「生成 AI 時代の医療者教育と研究：生成 AI とどう向き合うか」をテーマにしたご講演があった。

今回の講演では、生成 AI の基本構造から医療者教育・研究における活用法、さらには注意点までが体系的に整理されていた。まず、従来の“見つける”ことを行う「識別 AI」と、文章や画像などを“生み出す”ことができる「生成 AI」の違いが示された。生成 AI（大規模言語モデル）の特徴は、要約・翻訳・文章校正・アイデア創出などの作業を高速化し、利用者の理解度に応じた説明や教材生成が可能になる点にあるが、その機能にも強みと弱みがある。講演では、AI へのいわゆる指示書であるプロンプトエンジニアリングの重要性にも触れられ、目的・形式・条件を明確に伝える「構造化プロンプト」や、対話を通じて出力を洗練させる「対話型プロンプト」など、教育現場で活用できる具体的な方法が紹介された。

医療者教育への応用としては、学生の個別学習支援、実習前の知識整理やガイドライン理解の促進、さらには説明資料の作成や質問に対する回答の準備といった患者コミュニケーションなど、多様な場面での活用が期待されている。研究面では、2023 年においては論文執筆支援などへの寄与にとどまっていたものが、2025 年以降には研究プロセス全体に AI が統合されていく未来像が描かれており、その進化の速さには驚きを覚えた。一方で、生成 AI には不正確な情報生成（いわゆるハルシネーション）

や情報漏洩が生じることはよく知られている。AI の出力を鵜呑みにせず、批判的吟味を行う姿勢が不可欠であると繰り返し強調されていた。AI に頼り過ぎると自身の判断能力やスキルの低下につながる危険性も示された。こうした利点とリスクを踏まえると、大学としては「AI を禁止するか、許可するか」という二項対立ではなく、「どのように適切に使わせるか」という視点が求められる。米国の医科大学ではすでに AI 教育がカリキュラムに組み込まれつつあり、学生が AI を使いこなす力を身につけることが教育目標として明確に位置づけられているという。

日本の医療系大学においても、AI リテラシー教育の体系化は避けて通れない課題である。そのためには、まず本学の学生がどの程度 AI を利用しているのか、どのような目的で使っているのか、教職員はどのような懸念や期待を持っているのかといった現状の実態を把握することが出発点となる。医学部・薬学部・看護学部、そして大学病院という多様な教育・臨床現場を抱える本学だからこそ、学部横断的な調査を行い、共通の課題とニーズを明らかにする意義は大きい。今回の講演を契機として、まずは本学における学習のデジタル化や AI 利用の実態を丁寧に調査することから始め、未来の医療者教育を設計していく取り組みを進めなければならないと感じた。

最後に、この文章の作成にあたって生成 AI を使用しているとすれば、どこに、どの程度、関与しているか、お読みの方は判断可能だろうか。まさにそのような視点で AI と向き合うことが、AI と共に歩む時代に求められる姿勢の一つと言えるのではないかと考える。

宮崎 誠（薬学教育推進センター／IR 室）

AI を考えるための 教養書

本学本部図書館・薬学部図書館の蔵書からいくつか紹介します

- ・佐々木閑・佐々木斎生『AI という鏡：人の価値とは何か』法蔵館，2026.
- ・結城浩『AI と生きる：対話から始まる成長の物語』SB クリエイティブ，2026.
- ・ユヴァル・ノア・ハラリ『AI 革命』柴田裕之訳，河出書房新社，2025.
- ・吉見俊哉『自己との対話—社会学者、じぶんの AI と戦う』集英社，2025.
- ・高橋宏瑞『生成 AI と歩む医療の未来地図：臨床・研究・医学教育はこう変わる』金芳堂，2025.
- ・トリーシャ・グリーンハーフ，ポール・ダイクストラ『医学論文を正しく選び・読む技術：生成 AI に振り回されないための基礎知識』日経メディカル編集部訳，日経 BP，2025.